

社  
會

峰



5 6 月 号

第 3 卷 第 5 号

通 卷 第 23 号

# 鷲峰目次

五六合併号

## 卷頭の言葉

唯我一人の悲願に生きる人々

木村義賢 4

自我偈講義／久遠の本仏と人間釈尊／その七

仏弟子に対する釈尊の人間観の中に

日高白象 6

## 人間の顔

小林白峰 20

虚空隨想滴々 ～その一～

川島本良 26

法華經の靈山虛空会について

## 白炎

西沢縁 31

日蓮宗全国青年会九州大会によせて

鷲峰会 38

身延山学生布教別動隊による

## 関西行学講習と街頭擊鼓宣令

大阪府下・兵庫県下・京都府下にて

信仰相談室

## 本仏信仰と祖先崇拜

△その二▽

日高白象編集部

40

32

第三十六回身延山本隊街頭布教案内

第九回身延山別動隊街頭布教案内

身延より池上まで擊鼓行脚布教敢行

第八回身延山青年行学講習会案内

第五回鷺峰行学研修会案内

本誌見本贈呈の打切りと誌代納入お願い

編集後記

記

表紙題字 …… 身延山法主藤井日静猊下  
表紙写真 …… インド靈鷲山へ渡つた身延山金剛の釈尊像  
表紙印刷 …… 大阪東洋印刷社長藤原秀憲氏寄進  
カット …… みのぶ教報提供

52 50 30 25 49 48 47

# に生きる人々

日蓮大聖人が宣揚された法華經の御本尊とは、申すまでもなく久遠実成の本師釈迦牟尼世尊のことです。通常、本仏釈尊とも申されていますが、その悲願の中には、法華經の第三章譬喻品に、

今この三界は、皆これ我が有なり

その中の衆生は、悉くこれ吾が子なり

しかも今の処は、もろ／＼の患難多し

たゞ我れ一人のみ、能く救護をなす

という有名な言葉があります。日蓮大聖人は、この本仏釈尊に、主師親の三徳ありとして、まことに主につかえるように、師に学ぶように、そして親をしたうように、常に本仏釈尊を恋慕渴仰されたのですが、今、前述の經文について主師親の三徳を論すれば「今この三界は皆これ我が有なり」というのが主徳をあらわし「その中の衆生は悉くこれ我が子なり」というのが親徳をあらわし「たゞ我れ一人のみ能く救護をなす」というのが師徳をあらわしています。

末法の世を救い、人々を救い得るものは、こうした主師親の三徳を兼ね備えられている本仏釈尊たゞ一人です。といつて、「末法の世の人々を救済することは、本仏釈尊が悲願されたもので

## 唯我一人の悲願

あつて、我々の悲願ではない。またその悲願を実現せしめるのも、本仏釈尊たゞ一人のみによつて、我々凡夫の遠く及ぶところではない』

という見解のもとに、我れ関せず、という態度でいることは、いやしくも法華經を信奉する者の態度とは申されません。何故ならば「我れ一人のみ能く救護をなす」というお言葉の中には、三世十方法界中、たとえ自分一人だけでも、苦しむ世の民衆を悉く救済して行かねばならないという、ギリギリするような本仏釈尊の悲願が込められているからです。

日蓮大聖人一代六十有一年の御生涯は、本仏釈尊につかえる仏子(仮使)として、本仏の悲願を、みずから悲願としてつらぬかれたのでした。大難四ヶ度、小難その数を知らずとまでも云われた、あの重疊した法難を堪え忍ばれたのも、一に此のためであつたのです。私たちもまた「唯我一人」の本仏の悲願を悲願として、せめて我れ一人でも、乃至一人の人に法華經を伝えようとする、ギリギリの誓願を立てなければ、仏子とは申されないであります。

立正大学三年

木村義賢

自我偈講義 / 久遠の本仏と人間釈尊 / その七

## 仏弟子に対する

### 釈尊の人間観の中に

日 高 白 象



12

ということの反証を試みてみました。

だ

前号では、提婆達多一代における惡逆行為の概略を述べ、その惡逆の現身にさえ、三世を通じて仏身を觀せられていた釈尊の人間観を、法華經第十二章の提婆達多品の中から紹介することによつて、これを資料の一つとして、

「人間釈尊こそ、久遠実成の本仏そのものであつた」

つては、阿私仙人として法華經を宣説された仏身を観

則ち釈尊は、仏弟子でもあり、しかも俗的には徒弟

(いとこ) という血縁に当る身でありながら、師の釈

尊御自身に対して、あくなき反逆をなしてやまなかつた提婆達多の如き、人間としては最底下的、生きながらの地獄界に狂乱している現身に、なおも過去世にあ

せられ、同事にまた未来世にあつては、天王如来として法華經を宣説される仏身を観せられたというのですから、釈尊のその境地たるや、まことに凡夫の想像も絶した驚異的な境地をいふほかはありませんが、蓋し釈尊の此の境地、いわゆる現在を時点とする三世同時の、仏知見そのものの中に立ち入つてみると、提婆達多の如き人間最底下の者に対してさせても、三世の仏身を知見されていたほどのことなのですから、まして況んや、現に人間最高位の仏身を成就されている釈尊の自身には、始みなき悠久の昔より、終りなき永遠の未来にかけて、変ることなき三世常住の、久遠実成の仏身が完成させていたといわれるべきであり、これ言い換えるならば、釈尊みずからの当体に、三世常住なる久遠実成の仏身が完成されておればこそ、提婆達多の如き悪逆の現身にさえも、三世を通して仏身を観することが出来たのである、という意味のことを述べたつもりでした。

然し、こうした反証は、これまでの教學上、ほとんど触れられたこともない試みであつただけに、読者の中には、あまりにも突拍子な此の反証に、或は異和感を感じたり、或は理解し難いものも多々感ぜられたこと、思ひます。

然し、もう一度ふりかえつてみると、釈尊にして反逆し抜いた悪逆の提婆達多に対してさせても、三世を通して仏身を観せられたほどであるならば、このことをもつて一挙に釈尊の三世常住を反証するまでもなく、提婆達多とは同じ仏弟子でありながらも、提婆達多とは反対に、釈尊に対して隨順していた他の多くの仏弟子たちに対してでも、なおさらのように三世に亘る仏身が観せられていなければならなかつたはずである。ということを釈尊自身の上に、繰り返して書くことが出来ると思ひます。

果して釈尊は、独り提婆達多のみならず、他の多くの仏弟子たちに対してでも、仏身為本の人間観をもつ

ておられたでしょうか。若し持つておられたならば、それは、どのように表明されていたのでしょうか。

このことは、提婆達多に関する三世仏身觀が、法華經に説かれており、必ずや同じ法華經經典の中で明らかにされている以上、必ずや同じ法華經經典の中であつたことになります。

そこで本講は、このことを再び法華經の中にたずねることによつて、

「人間釈尊の当体こそ、久遠の本仏そのものであつたのだ」

という反証を、更に普遍してみたいと思います。

こうした仏弟子の数は、時によつて増減があり、一定ではなかつたにせよ、それほど大勢の仏弟子を従えて、インド大陸を隨所に遊行されていた釈尊の布教は如何に壯観なことであつたことでしょう。

人々は仏陀の人格の偉大さ、その説かれる教えの尊さ、そして僧伽（サンガ・教團）の偉大さに感動し上下あげて三宝帰依を誓わずにあられなかつたことでしょう。

仏法僧の三宝の中の、僧宝を形成する此等の仏弟子たちは、比丘僧伽（男子部教團）と比丘尼僧伽（女子部教團）とに分かれていました。その代表的な仏弟子が頭陀第一の大迦葉（ダイカショウ）尊者

多聞第一の阿難（アナン）尊者

智慧第一の舍利弗（シャリホツ）尊者

解空第一の須菩提（シユボダイ）尊者

說法第一の富樓那（フルナ）尊者

神通第一の目連（モクレン）尊者

釈尊の御在在中には、數えきれないほど多くの仏弟子がいました。伝えるところによれば、釈尊の成道後間もない頃より、その生涯の終りに至るまで、釈尊のまわりには日々千数百人の仏弟子が常随していた、といわれているほどです。

論義第一の迦旃延（カセンネン）尊者

天眼第一の阿那律（アナリツ）尊者

持戒第一の優婆離（ウハリ）尊者

密行第一の羅喉羅（ラゴラ）尊者

という十大弟子であり、釈尊の母である摩訶波闍波

提（マカハジヤハダイ）比丘尼と、羅喉羅（ラゴラ）

尊者の生母であり釈尊の太子時代の妻であつた耶輸陀

羅（ヤシユダラ）比丘尼とが、比丘尼僧伽を代表して

いました。

今、これら代表的仏弟子に対する釈尊の、仏身為本

の人間觀を、法華經經典の順序に従つて述べれば、ま

ず第三章の譬喻品において、釈尊みずから智慧第一の

舍利弗尊者に対して、

舍利弗、汝、未來世に於て、無量無邊不可思議劫

を過ぎて、若干千万億の仏を供養し、正法を奉持

し、菩薩所行の道を具足して、當に作法すること

を得べし。

号を華光如來・應供・正德知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・仏・世尊といふ、國を離垢と名けん。

と述べてより、離垢淨土の風光をたゞえ、華光（ケコウ）如來の功德を称揚し、更に華光如來の弟子であ

る堅滿菩薩が、華足（ケソク）如來となる未來のこと

までも明らかにしています。

次に第六章の授記品においては、頭陀第一の大迦葉

（摩訶迦葉）尊者に対して、

我が此の弟子摩訶迦葉、未來世において、當に三

百万億の諸仏世尊を奉勸して、供養・恭敬・尊重

・讚歎し、広く諸仏の無量の大法を宣ぶることを

得べし、最後身に於て仏になることを得ん。

と前置きして、光明（コウミヨウ）如來という仏号

を授けており、同様にして解空第一の須菩提尊者に対しては名相（ミヨウソウ）如來、論義第一の迦旃延尊者に対しては闍浮那提金光（エンブナダイコンコウ）

如来、神通第一の目連尊者に対しても多摩羅跋旗檀香（タマラバツセンダンコウ）如来という仏号を授けています。

次に第八章の五百弟子受記品においては、富楼那尊者（別名—富楼那弥多羅尼子—フルナミタラニシ）に対して法明（ホウミヨウ）如来という仏号をさすけ、更に釈尊が成道後、鹿野園（ロクヤオン）において始めて教化した五人の比丘の中の僧行陣如（キヨウジンニヨ）比丘をはじめウルビンラ迦葉・ガヤ迦葉・ナダイ迦葉・カルダイ・ウダイ・アヌルダ・リハタ・コウヒンナ・ハクラ・シユダ・シャカダ等々の五百の弟子たちにも、一律に普明（フミヨウ）如来という仏号をさすけています。

次に、第九章の授学無学人記品においては、阿難尊者に對して山海慧自在通王（サンカイエジザイツウオウ）如来という仏号、羅喉羅尊者に對して是跋七宝華（トウシツゼウケ）如来という仏弟子をさすけ、更に

学（學問の必要な者）や無学（もはや學問の必用ない者）など二千人の人々に對しても、一様に宝相（ボウソウ）如来という仏号をさすけています。

第十二章の提婆達多品では、提婆達多に對して天王如来という仏号をさすけられたことは、これまでに述べた通りですが、次の第十三章の勤持品の中では釈尊の母であるマカハジャハダイ比丘尼に對して一切衆生喜見如来という仏号、羅喉羅尊者の母であるヤシユダラ比丘尼に對しては具足千万光相如来という仏号をさすけ、その他六千人の比丘尼に對しても、經典上その仏号は記されてはいませんが、遂次、未成仏の確証が与えられています。

未成仏の確証を授けるということ、これを授記といふのですが、この授記は、法華經經典中、十大弟子をはじめ比丘・比丘尼のすべての仏弟子に對して行われているものです。

因に、十大弟子の中の阿那律尊者と優婆離尊者とは

經文上、厳密にいえば授記に漏れているようですが、然し、これは省略されているものであつて、提婆達多ほどの惡逆な者でさえも天王如來という授記を得てゐる以上、仏弟子である出家も在家も、生きとし生ける

ものすべてのものは悉く、一人も漏さず、未來成仏の確証が与えられているとみなすのが、法華經の本旨と申されましよう。

事実そうなのです。釈尊の仏知見によれば、遠い過去の世の人々でも、現在いすれの国の人々でも、そして永遠の未来の世の人々でも、この地上に（靈界をふくめて）生きとし生けるすべての者は、老若男女、貧富貴賤、民族・人種の如何を問わず、またその罪の如何をも問わず、悉く釈尊みずから手によつて、既に未來成仏の確証が与えられているのです。

法華經教義の大綱は、一口に迹門の二乘作仏と、本門の久遠実成といわれていますが、二乘作仏といううとこそ、永劫の未来をかけても、すべての人々が必ず

成仏出来るという、その本性の尊嚴をうたいあげたものにほかなりません、

## 14

二乘、それは声聞（しようもん）と、緣覺（えんがく）のことですが、声聞というのは、釈尊の教えを専ら聽聞信受する人々のことであり、緣覺というのは、聽聞した釈尊の教えを、みずから修証すべく、独り想念工夫を専一にする人々のことで、独り覺るといふところから独覺ともいわれています。

なお教法上からいえば、声聞は主として、

「苦・集・滅・道」

という四諦の教えと、

「正見・正思・正語・正業・正命・正精進・正念・

正定」

という八正道の教えとをよりどころとしており、縁覚は主として、

「無明・行・識・名色・六入・触・受・愛・取・有

### ・生・老死」

という十二因縁の教えをよりどころにしている人々ともいわれています。

これらの人々は、十界の中では地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上という六道輪廻の迷界より離れて、声聞・緣覚・菩薩・仏という四聖界の中に数えられてはいますが、然しそれでも、なお初期大乗仏教の間では、

### 「二乘不成」

といつて、永劫成仏することは出来ないもの、と決めつけられていきました。

というのは、仏滅後の小乗佛教徒が、旧習を墨守するあまり、戒律中心の保守的な形式主義に流れ、自己の煩惱を断滅することのみにキユウ／＼として、勢い世を救い、人を救うということを、第二義的なものとみなしてしまいか、或は全く等閑視して起俗的な慈悲

主義に堕ち入つていたからです。

これに対して大乗佛教徒は、小乗の形弊を打破して進歩的な精神主義運動を復興し、出家・在家の差別を撤廃して、みずからを菩薩と称し、

### 「布施・持戒・忍辱・精勤・禪定・智慧」

という、修すべき六波羅蜜の中でも、世の人々を利益する布施の行の第一とし、そうでない小乗の自己中心的な人々を、悉く二乗と下して、小乗の在り方を極力否定するあまり、遂に二乗不成仏までも標榜するに至つたのでした。

大乗佛教では、二乗の代表的人物として舍利弗・目連・迦葉・阿難………といつた

様な釈尊十大弟子の名をあげていますが、もとより釈尊在世中の十大弟子が、保守的な形式主義者であつたろうはずはありません。小乗が小乗として否定されたのは、仏滅以降における後世の小乗教徒であつたのですが、大乗教徒は、十大弟子を小乗の代表者とみなし

彼等を二乗として否定することによって、当代の小乗仏教全体を否定しようとしたのでした。

かくして舍利弗・目連・迦葉・阿難……等々の仏弟子たちは、大乗仏教の中にあつては、久しい間、二乗としてけなされ、永劫不成仏の烙印をおされて来ました。

ところが法華經に来つて、最も嫌われていた二乘の成仏が、はじめて許されたのです。ここに大乘經典中一切開会（かいえ）を眼目とする法華經の一大特色があるわけですが、蓋し二乘成仏ということは、日蓮大聖人の出現されるまでは、あくまで衆生の立場を主としたものであつて、久遠の本仏釈尊の立場を主としたものではなかつたのです。

「法華經では、舍利弗・目連・迦葉・阿難……等々

の二乘でさえも成仏が許された。いわんや大乗を待つものは、悉く成仏出来ることは云うまでもない」

というように、一切衆生悉有仮性（すべての者は悉

く仮性をもつてゐる）という大乘仏教の根本理念に立つて、その本具の仮性を開顯する最高の教法として、法華經が尊ばれたことは申すまでもありませんが、然しそれは、あくまで衆生の立場に立つたものであり、云いかえれば法華經は、日蓮大聖人以前にあつては、衆生の立場を主とする限り、八万法藏という一切經中仮性を開顯するための最高の手段、という域を出るものではなかつた、と申されましよう。

では、同じ二乘作法にしても、衆生を主とした立場や、久遠の本仏釈尊を主とした立場といふものは、一体どういう内容のものであり、またこれには、どういう相違があつたのでしょうか。

古來、法華經經典を読むのに、二つの読み方があるとされて来ました。いわゆる「順説」と「逆説」といふ二つの読み方です。

もとより法華經經典は、二十八章によつて構成され

いう大乘仏教の根本理念に立脚して、

ており、前十四章を「迹門」といゝ、後の十四章を「本門」と称し、迹門の中心は第二章の方便品、本門の中心は第十六章の如來寿量品、そして方便品は二乗作仏、如來寿量品は釈尊の久遠実成を明かにしたものであり、これが法華經經典の二大眼目とされています。

ところで順説といふのは、こうした經典構成上、先きにある方便品を中心として、後にある如來寿量品をみるとから順説といふ、逆説といふのは、後にある如來寿量品を中心として、先きにある方便品をみるとから逆説といふのです。

蓋し、ここで順説といふ逆説といふ、その「讀」というのは、そういう順序で「經文を口に読む」というのではなくして、「經文の心を觀する」という意味のものなのですから、むしろ順觀、逆觀といった方が妥当であるかも知れません。

いずれにしても、この両者は、一切衆生悉有仏性と

「声聞・緣覺」という二乗でも、また提婆達多のような極惡人でさえも、生きとし生けるすべての者は、未来必ず、何時かは菩薩道を行じて悉く仏身を成就することが出来るのだ」

という悉皆成仏の可能性を明かにしていて、その相違はないのですが、然し前者は、釈尊の久遠実成が開頭されない以前における「九界所具の仏界」という衆生因行の立場に立つて、後者は既に釈尊の久遠実成が開顯された時点における「仏界所具の九界」という本仏果上の立場に立つて、その相違は、まさしく天地雲泥のものと云われましよう。

「九界所具の仏界」というのは、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上・声聞・緣覺・菩薩という九界のものが、本来仏性を悉く備えているということであつてこれによつて、未來成仏の可能性を明かにしているのですが、然し迹門依本である限り、そこには未だ久遠

の本仏の開顕はなく、従つて久遠の本仏に攝取護念されることもなく、ために九界の衆生は、成仏の可能性を信するまゝに、法華經を仏性開顕の至上の手段とし

これを杖、柱とも地図とも橋とも頼んで、嶮々たる峻嶮をよじ登り、洋々たる生死の大海上に舟を漕ぎ出して行くほかなかつたのです。

これを通常「従因至果」の行というのですが、こゝ

では、目的地は氣も遠くなるほど遠い彼方にあり、人々はそれをめざして、安心立命もないまゝ、自己を鞭うわつく、一歩一歩と血みどろの苦行を続けていつたのです。

これに対しても、「仏界所具の九界」というのは、既に釈尊の久遠実成が開顕されている以上、九界のすべての者は、久遠の本仏の大慈悲の中に攝取護念されており、従つて衆生は法華經を自己本具の仏性を開顕する手段としてなく、本仏の因行果徳の二法として受持し、これを受持することによつて、仏性は特別に開顕

しようとしなくとも、おのずから開顕されて行つたのです。

これを通常「従果向因」の行というのですが、こゝでは、遙か彼方にあつたはずの目的地は、既に法華經受持の当処に現前しております、一歩も行かずして、本仏釈尊と親子面奉した仏国土に、安心立命しているのです。

そうです、親子の関係でいうならば、前者はあたかも親はあつても、親を親と知らずに、親をさがし求めている子の立場であり、後者はあたかも、親をして仰ぐ子を、吾が子としていたいいる親の立場と申せましよう。

要するに方便品を中心とした述門依本の順説は、本仏とかけはなれた衆生の立場に立つものであり、この限りにおいては法華經は、本仏と衆生を結ぶ縄でしかなく、衆生は、法華經を綱とたぐつて仏界へと登つて行くのです。

ところが如来寿量品を中心とした本門依本の逆説で

学無学の二千人が宝相如来

は、釈尊の久遠実成が開顯されている以上、一切衆生

提婆達多が天王如来提

婆達多品

を悉く吾が子として包摶攝取した久遠の本仏の立場に

摩訶波闍波提比丘尼が一切衆生喜見如来

勤持品

立つものであつて、衆生は一步も行かずして、本仏の

耶輸陀羅比丘尼が具足千万光相如来

一勤持品

マンダラ仮界に安住し、もはや法華經は本仏と衆生を  
つなぐ單なる網ではなく、既に本仏の大光明として、  
すべての衆生を照し、はぐくんでいるのです。

こゝにおいて、

舍利弗尊者が華光如來

譬喻品

大迦葉尊者が光明如來

授記品

迦旃延尊者が圓淨那提金光如來

授記品

目連尊者が多摩羅跋栴檀香如來

授記品

富樓那尊者が法名如來

五百弟子品

憲陳如比丘が五百人が普明如來

五百弟子品

阿難尊者が山海慧自在通王如來

一人記品

羅喉羅尊者が毘七寶華如來

一人記品

これに対しても、逆説の場合の、本門依本の久遠の本  
仏の立場にあつては、永遠の未来において完成される  
であろう衆生成仏の仏身は、その授記の当所において  
悉く釈尊みずから叡智によつて知見されていたので

す。

いな、本仏教尊の仏知見に、衆生成仏の未来の事相が照鑑されていたればこそ、経文の如く、その授記の当所において、未来完成されるであろう仏身も、その国土も、そしてその弟子信徒に与える利益をも、たゞえることが出来たのだ、といわれるべきでありますよ。

## 16

別現象の奥に潜在しているものであり、いわゆる「九界所具の仏界」という、そのことです。  
またこゝでいう事とは、単なる差別事相というものではなくて、平等理性に照し出されているものであり、いわゆる「仏界所具の九界」という、そのことです。

解りやすい例をあげていうならば、法華経の第二十

章に、不輕菩薩の但行礼拝の故事が説かれています。

今この故事を、迹門の理の立場でみると、不輕菩薩の礼拝行は仮性礼拝であり、不輕菩薩は、すべての人々の心の奥に潜在している平等なる仮性を礼拝したことになります。

また本門依本の日蓮大聖人の立場は、「事の法門」ともいわれています。

本来、理とは平等の理性（リシヨウ）ということであり、事とは差別の事相ということですが、こゝでいいう理とは、單なる平等理性というのではなくして、差

もいわれています。

一方、この故事を、本門の事の立場でみると、

仮性礼拝と称する傾向が強いようですが、蓋しこれは迹門における理の法門の域を出ないもの、と申されましよう。

これこそ、まさしく仏身礼拝であり、不輕菩薩は、すべての人々の当体に、未来成就するであろうところの仏身そのものを観じ、三世を通じて衆生の当身を礼拝した、ということになるのです。

むべなるかな、本門の事の法門を鼓吹された日蓮大聖人は、般心本尊妙の中で、

「不輕菩薩は所見の人に於て仏身を見る」

と表明されおられます。この言明こそ、不輕菩薩の但行礼拝を、迹門の理の立場にあつては仏性礼拝といわれても、本門の事の立場にあつては、仏身礼拝とみなすべきであるということを、端的に裏付けていふ何よりの証左であります。

蓋し不輕菩薩が、所見の人に仏身を見たのは、不輕菩薩自身、既に本門の事の立場に住していただからであり、これと同様に二乗作仏の例証にしても、本門の事の立場よりみれば、授記の当所に、仏弟子の仏身を見たという本位の知識がなければなりません。

法華經の逆説こそ、日蓮大聖人の根本的立場ですが、本門如來壽量品を中心として法華經二十八章をみる場合、則ち久遠の本仏釈尊の立場に立つて迹門をみれば、未來成仏の授記を与えられた順讀時の二乘をはじめ、すべての人々の当身には、仏知見によつては既に未來完成するであろう仏身が観せられていたのであり、また、そうであつたればこそ、迹門である方便品にさえ我本立誓願 欲令一切衆 如我等無異  
如我昔所願 今者已満足

我れもと誓願を立てゝ  
一切の衆をして  
我が昔の所願の如き  
今すでに満足しぬ

という釈尊みずからのお言葉が述べられてゐるものであり、更にこのことは本門の如來壽量品・自我開の

結びに、

毎自作是念 以何令衆生

得入無上道 速成就仏身

つねにみずからこの念をなす

何をもつてか衆生をして無上道に入り

速かに仏身を成就することを得せしめん  
と、本仏釈尊みずから悲願せられている、その仏身  
に通するものです。

本仏釈尊は無始久遠の昔から、一切衆生をして釈尊  
の如き久遠の仏身を成就させようと誓願され、速門授  
記の当所に、未来完成するであろう衆生一人一人の仏  
身を感じて、

「如我昔所願 今者已満足」

と仰せられ、更に授記された衆生が、本仏護念の中  
にあつて、仏身を完成することの一日も速かならんこ  
とを願われたのでした。

法華經經典は法華經以前における大乘佛教經典の流

れに同じく、衆生の立場を主体とする順説も可能とさ  
れるように説かれるると同時に、また讀つて法華經特  
の本仏釈尊の立場を主体とする逆説も可能とされるよ

うに説かれていて、こゝに法華經の妙味がありますが  
要するに法華經における順説時の人間釈尊は逆説時に  
おいては、既に本仏として顯現されており、こゝに法  
華經の人間釈尊こそ久遠のなむである、ということが  
出来るのです。

隨分、廻りくどいことをダラ〜〜と語らひましたが、

次に日蓮大聖人が図顯された大マンダラと本仏釈尊の  
関係について、ふれてみるとことにいたしましょう。

（以下次回）

# 人間の顔

小林白峰



## 仏像の顔

られた。

富山師は、本年四月六日に入仏式をいとなんばかりの身延町波

尊として、身延山より寄進された  
金銅の本仏釈尊像、これは、原型  
を鋳型にとつて、そのままそつくり再鋳造したものであるが、その

鋳造の任に当つた京都平安美術の  
社長富山高博師が、去る日ひよつ  
は懐しさがイツバイ。

款談に時のたつのも忘れて、と  
うとう富山師は、本妙庵に一泊さ  
れた。この時の談話中、次のよう  
な興味深い話しがあつた。

顔は

人格をあらわす

鏡に向つて

人格をたずねよ

こり、波木井の本妙庵へ訪ねて来

それは、生きている時の人間の顔と、死んだ時の人間の顔との比較であった。富山師はこういった

「私は今までに、随分多くの御仏像をつくつた。お駕迎さまをはじめ日蓮聖人の御尊像も、観音さまも仁王さまも、數えれば切りのないほどつくつたものだ。

その殆どのものは青銅だつたが然し、どんなに大きくつくつてみても、仕上つてしまふと、思つたよりは、はるかに小さく見える。

たとえ等身大につくつても、生きた人間に比較してみると、どんなに寸法に寸分のくるいがなくても、見た目には如何にも小さい。

だから仏像が等身大に見えるた

めには、等身大以上に思い切つて大きくならねばならない。

これは全く奇妙なことだが、顔は形も大きさも、そつくりそのまま同じものではあつても、血が通つてゐるかどうか、生きているか死んでいるかによつて、かくも相違が出て來るとしか思えない」

私は富山師の此の話を聞きながらつくづくと思つた。

△その相違は、おそらく人格によるのであるまい。人格とは内面的なものではあるが、その人間の全身の皮膚や毛穴、そして瞳孔よりも常に發散している。

それは、人間のエネルギーと言

えるかも知れない。或は持つた霊

圓氣とも言えるかも知れない。そういうものが、その人の深い所から出るか、浅い所から出るか、強くきく出るか、小さく出るか、強く出るか、弱く出るか、清く出るか汚なく出るか、明るく出るか、暗く出るか、温く出るか、冷たく出るか、そういう出方によつて、その人の人格がきまつて来る。

深い人間 浅い人間

大きな人間 小さな人間

強い人間 弱い人間

清い人間 汚い人間

明い人間 暗い人間

温い人間 冷い人間

というように……。

たとえ五尺たらずの小男であつ

ても、大きな人格を持てば、小さな

人格しかない六尺豊かな大男よりも、だまつて並んで坐つているだけでも、はるかに大きく見えるはずである。

歌にしても踊りにしても、芸の達者な者ほど、舞台を圧して大きく見えるというのも、あたりを払うほどの気迫が、そうさせるのであろう。

然し、人間ひとたび死せば、それまで全身より発していたエネルギーといふか空氣といふか、そうした生命の氣は消え失せて、このため死は、生きていた時と同じ大きさではあっても、眼には急に小さくなつたようにしか映らない

青銅で鑄造された御仏像……

して迫つて来る。

なるほどそれは、触れれば確かに冷たいものだろう。然し、それを仰ぐ者の心によつては、温く感じ

もされよう。また小さな御仏像でも、大きく、圧するように感じもされよう。それが信仰というのではなくからうか。

大切なことは、表現された形よりも、眼に見えるカツコウよりも常に、その人の全身より発して全

ていた。私は、思わず二度も読み返した。それは、それほど印象づけられる記事だつた。内容はこうだつた。

☆

この間、サウジアラビヤを旅行した。この国は、回教國の中でも戒律の最もきびしいところであるとなり、魂の問題として正しい信仰の必要性が人生不可欠のものと

### 砂漠の人の顔

或る日、包み紙をほどいた古新聞を、何気なしに読んでいると、「砂漠の男」

と題した立教大學総長松下正寿氏の隨筆が、カコミの小欄にのつてゐた。私は、思わず二度も読み返した。それは、それほど印象づけられる記事だつた。内容はこうだつた。

あるまいか。

こゝに人間の心の在り方が問題

のため死は、生きていた時と同じ大きさではあっても、眼には急に小さくなつたようにしか映らない

て いる。そ うで ない 女は、外 国人

で ある。自 分の 夫以 外に、顔を 見  
せ ては い け な い、と い う 風習 が あ  
る そ う だ。

そ う い わ れ る と、な お さ ら 見 た

く な る も の だ が、ぜ ひ 見 たい の な  
ら、サウジアラビヤ の 夫 人 と 結 婚  
す る 以 外 に 道 は な い、と 聞 か さ れ  
て、あ き ら め た。

男 の 顔 は、い く ら で も 見 ら れ る  
印 象 的 の は、砂 漠 を 歩 い て いる

男 の 顔 だ。実 に 立 派、そ う い う よ  
り は 神 々 し い。

目 眩 が 整 つ て い る と か、高 い 教  
養 が あ る、と か い う 顔 で は な い。

未 開 人 の 間 に 見 受 け る よ う な、無  
邪 気 な、か わ い い 顔、と い う の で

も な い。

私 は ア メ リ カ に も、ヨーロッパ  
に も、東 南 ア ジ ア に も 行 つ た が、  
こ う い う 神 々 し い 顔 を 見 た こ と は  
こ う い う 神 々 し い 顔 で は あ る ま い か、  
な い。こ う い う 顔 は、回 教 と 関 係  
が あ る の で は あ る ま い か。

回 教 の 戒 律 に よ る と、信 者 は  
日 五 回、ア ラ ー の 神 に 祈 愣 を さ う  
げ る 義 務 が あ る。未 明 に 一 度、正  
午 に 一 度、午 後 に 一 度、夕 方 一 度  
夜 一 度、合 計 五 回 で あ る。

我 れ 〜 と 違 つ て、砂 漠 に は 何  
の 乐 し み も な い。そ し て 彼 等 は、

常 に き び し い 自 然 と 戰 わ な く て は  
な ら な い。何 時、他 の 部 族 か ら 裂

わ れ る も か も 知 れ な い。頼 れ る の は

ア ラ ー の 神 一 人 で あ る、

だ か ら 彼 等 は、日 に 五 回 祈 愣 と

い う 戒 律 を 守 る。彼 等 は 神 に 近 づ  
い て い る。だ か ら、こ う い う 神 々  
し い 顔 に な る の で は あ る ま い か、

と 私 は 思 つ た。

ひ る が え つ て、我 れ 〜 の 周 囲  
を 見 渡 す と、一 人 残 ら ず 俗 つ ほ い  
顔 だ。私 の 顔 も、そ の 典 型 的 な も  
の だ か ら 文 句 は 言 え な い が、と に  
か く、ふ だ ん 考 え 〜 い こ と が 顔  
に 現 わ れ る の は 当 然 で あ る。

サウジアラビヤ も 次 第 に 近 代 化  
の 道 を た ど る で あ る。近 代 化 が  
進 む と、嚴 重 な 戒 律 を 守 る と い う  
風 徒 が 崩 れ る も か も 知 れ な い。

私 は、こ の 国 の 近 代 化 に は 期 待  
を か け て い る が、あ の 神 々 し い 顔

が、地球から消えるかと思うと、

ない。

淋しい感じがする。

☆

以上が、松下總長の全文なのだ  
が、私はこれを読んで、強烈なシ  
ヨツクを感じた、というよりも寧  
ろ、自分自身をかえりみて、思わ  
ず顔から火の出るような恥しさを  
覚えずにはおれなかつた。

仏教でも古来、三十二相・八十

種好という仏さまの尊い相好が説  
かれている。今、その説はとも  
かくとして、要するに三十二相・  
八十種好というのは、一目、見た  
だけでも、ひれ伏したくなるよう

な仏さまの、神々しいばかりのお  
姿を象徴していることには違ひお

佛教徒は、こうした尊い仏さま  
のお姿を仰ぎながら、常に、

「成仏、成仏…」

ということを口にしている。

然し成仏ということは、まさしく  
仏陀の如き大人格を、みずから  
の身に完成することであり、い、  
かえれば仏陀の如き神々しい相好  
を、みずから相好とすることで

あり、本来そうあらねばならない  
ものであるはずなのに、それにも  
かゝわらず、そう思つて成仏とい  
うことを考えている人が、今の世  
に、果して幾人いるだろうか。

いや、そういう私でさえ、松下  
總長の新聞隨筆を読んで、強いシ

ヨツクをうけるまでには、そいい

うこと気に気つくことさえなく、仏

陀の尊顔は尊顔として、遙かに私

たちの凡顔と隔絶し、みずから凡  
夫の俗っぽさに甘じ切つていたの  
は事実である。これは、いやしく  
も成仏ということを口にする以上  
甚しく矛盾したことであることは  
言うまでもない。

松下總長は、

「アラビヤの砂漠の男の顔が皆、  
砂漠という大自然との戦いや、或  
は他部族との戦い、そういうつた日  
常に迫る危機感から、日に五回も  
神に祈りを捧げねばならぬという  
厳しい戒律によつて神に近づき、  
おのずから神々しいばかりの相好

が、形成されるに至つたのではあるまいか」

と述べているが、その当否はともかくとして、万教にすぐれた法華經をもつて、世界広布・世界永世平和を大眼目としているはずの日蓮門下の人々が、かの崇高な大乗無戒の教えを俗化してしまつてろくろく祈りさえ拂げず、修すべき菩薩行さえないがしろにしている墮状は、今こそ大いに反省懺悔すべきであろう。

本来ならば、日蓮門下のすべての人々の相好は、三十二相・八十種好という、仏陀の尊容には遠くとも、大自然との戦いよりも、国と國、民族と民族との戦いよりも

もつとく厳しいはずの、その菩薩行によつて、アラビヤの砂漠の男も及ばぬ、地上稀なる、神々しいばかりの菩薩の相好として、形成されていなければならないはずである。

本化の菩薩の使命も忘れ、法戰も忘れたノンベンダラリとした俗っぽい宗門人の顔・顔・顔……ひんむいてしまいたいほど破廉恥な顔、仏祖のみ前に頭もあげられないほど浅ましい顔。

この顔は、不斷に果敢な菩薩行を展開する以外に、直しようもあるまい。人のことではない。自分自身の、このみにくい顔のことなのだ。

△おわり△

## 身延山青年行学

### 講習会案内

第八回身延山青年行学講習会は全国日蓮門下青年大会に先きだつて左記の通り開催されます。

時	八月二十一日～二十四日
所	身延山西谷祖廟常経殿
宿舎	男子清水坊・女子岸之坊
会費	二千五百円、米一升
資格	中学卒業以上四十才まで
受付	二十一日午前十一時、常経殿、中食すませておくこと

申込 身延山布教部青年行学  
講習会係あて、ハガキ  
に年令・性別・職業明  
記のこと  
解散 二十一日午後二時

# 虛空隨想滴々

八その一

法華經の靈山虛空会に關して

立正大學三年 川島本良

世の中には、僅の金を稼ぐ為に、巷にさまよ

の一例にすぎないが……。

う人達が少なくない……。あまりにもみじめで  
正視出来ないようなことも稀ではなかつた。

山本周五郎の大作「虛空遍歴」の一節である。

躰車（いざりぐるま）を自分でこぎながら、  
煮（に）売り屋をまわつて、残飯をねだる老人  
十か十一ぐらゐにしか見えないのに、暗がりに  
立つて、客を呼んでいる少女。赤子を背負い、  
幼児を一人も伴つて、ごみ箱の中をあさつてい  
る執拗な正視である。

躰車で残飯をねだつてはいるのは、いのちだけ  
く、五歳より上とは思えない子供。これはほん



ての老人は、もう肉体から去つて、虚空のどこ

（自由な空間）を指しているようである。

かを、さまよつてゐるんだ……。

十五才の時のおれは、いまのおれではない。

肉体も違うし、心中も違う。十五才のおれが今のおれに成長したのではなく、十五才の時

法華經の虚空は、仏陀を離れては考えられないから、兩者の意味の一一致点などさぐろうなどとは思はない。法華經の虚空への注目を、喚起したいところではあるが……。

おれは、そのまゝどこかに存在してゐるのではないか。ちようど死んだ親父の勘也が、死によつて消滅したのではなく、虚空のどこかに存在

中村座の幕があがり、満員の観衆の拍手喝采にむかえられて、中藤冲也の下座音楽がはじまる……。

してゐる、と感じられるように……。

これは「虚空遍歴」の主人公である淨瑠璃作曲家・中藤冲也の独言である。

私は、讀後感想を書くつもりはない。法華經の靈山虚空会の虚空と、意味は全く違うかも知れぬが、「虛空遍歴」の「虚空」という二字に惹かれたのである。

周五郎の云う虚空は、人間世界にあつて、しかも人間に見えぬ空間とでも言ひうか、靈界とでも云うか、肉体を離れた精神のさまよう世界（俗事に束縛されない世界を意味するのであらうか。

周五郎の云う虚空は、人間世界にあつて、しかも人間に見えぬ空間とでも言ひうか、靈界とでも云うか、肉体を離れた精神のさまよう世界（俗事に束縛されない

沖也が希望を求める、情熱をもやせばもやすほど、孤獨・絶望・裏切り・嘲笑・悔謾・拒絕・病苦などが、はねかえつてくる。周五郎のいう虚空界とは、虚無の

あんまりひどい、とわたしは泣きながら咳（つぶや）いた。なにが悪くて、の方をこんなに苦しめるのか・どうしてなのか。ねえ、どうしてなんですか。誰という相手に向つてではない、の方をこれほど痛めつけるのは、わざと

そうする何かあるように思われたのだ。中村座の舞台で、常磐津の出語りをしたときの姿。半四郎さんの樂屋口で、すれちがつた時の姿。

八百藏さんや宗十郎さん、そのほか一流の役者衆に尊敬され、誰からも慕われていたあの方。

これは沖也節に、身心共に自己を変えられ、沖也節を、自己の本来の生命体とまで感じていた、お京という女性の独白である。

人間個人の意志では、どう仕様も無いことが、世の中には、あまりにもあり過ぎる。

それは現実のものではないし、どこかで弾いたり、うたつたりしているのが、聞えてくるようでもなかつた。過去と現在とが、わからがたく一つに溶け合うところ、つまり時間とも関係なく、場所とも関係のないところから、聞えてくるというように思えるのである。

幸を与えるなどあるのなら、もう少し、あなたをゆるしてやつてもらいたい。それがどんなに無慈悲なものであつても、これ以上の方を苦しめるほど無慈悲にはなれない筈ではない

沖也節を聞いたお京の心境であるが、どこか法華経の講義で聞いた言葉に似ていてオヤツと思われる。

私は虚空とは、時間・空間を超越した者が、更に生か。あたしはそんなふうに心の中で怨んだり、願つたりした。

あると解し、そう信じている。それに似た表現が、こ

の小説の中に、今こうしてある。

法華經の教え、仏教々理の全では、むずかしい専問用語の中にのみ、秘められている訳ではない。我々の周囲に、それを教えてくれる事象はいくらでもある。

ドイツの詩人ヘルマン・ヘッセの著作「ジツタルタ」の中に、河の渡し守をしている老人が登場する。彼は、河から実に多くのものを学んだ、と求道者ジツタルタに告げる。ジツタルタは、多くのバラモンの高僧達、そして仏教の言葉にも納得行かず、最後、かつて出あつた渡し守に教えを請い、悟ることを得るのであるが、その対話の一節には、まずこののような前書きも必要となる。

—— 知ならば、人に語ることも出来ます。觀知は併し人に語ることは出来ません。人は、それを發見することは出来ます。それをもつて奇蹟を為すことも出来ます。が併し、それを人に説いて

たり、教えたりすることは出来ません。  
△渡し守△

河は、どこへ行つても、いつも同じ河であることに相違はない。水源であろうが、河口であろうが、或は滝となつて落ちていても、渡し場でも、急流をなしていても、海に注いでいても山を流れていても……どこへ行つても、いつも同じ川なのです。

即ち河にとつては、いつもたゞ「現在」というものがあるだけで、過去という暗い影はなく未来という暗い影に、おびやかされてもいいない△ジツタルタ△

私の生涯もまた、一つの河に他ならないことに気付きました。少年の日のジツタルタを、分け離でいるものは、たゞ影であつて、決して実在するものによつてはありません。ジツタルタの生れる以前の生命も、過去ではなく、ジ

ツタルタが死ぬことも、梵に還つてゆくこともまた未来ではありませんでした。

過去として存在する何物もなく、何物もまた未来に於て存在するではありません。一切は今ここに実在しています。一切のものは、本實であり、現在なのです。

仏陀の説く縁起も、存在の法則に外ならない。一切の苦は、時間上の出来事である。時間という存在、煩苦という条件を消滅するならば、この世の全ゆる苦難も、一切の敵意も、忽ち消滅し、克服されると思われる。

そして、この一節は法華經に、仏陀が惡逆非道の提婆達多の現身に、過去の阿私仙人、未來の天王如来を観じ、不輕菩薩が道行く人々に仏身を観じたとあるに通ずるものを見逃せない。

話は、わき道にそれたが、以下法華經の虚空会について、少々愚見を述べ度いと思う。

▽以下次号▽

## 第五回 鷲峰行学研修会案内

鷲峰行学研修会は、昨年三月鷲峰第一期生卒業と同時に始まり、これまで四度実施しましたが、今度第五回目は、八月二十一日より始まる身延山青年行学講習会の直前、本妙庵において左記の通り実施します。

時 八月十七日午後一時開講より二十日夜まで四泊四日

所 瞑悟園本妙庵

定員 十名、申込順（超過の場合はお断りします）

資格 鷲峰読者および読者に紹介された方、年

令・学歴・性別を問わず

会費 不要、但し一人米二升

携行品 ウチワ太鼓、着替衣、軽快な履物、

交通 身延駅よりハイヤーで波木井三区製材所横の遠藤喜男（本妙庵世話人）宅下車、徒歩山道八丁。

官製ハガキにて鷲峰会へ。

申込

白炎

西沢

縁

碎けたる貝殻白し南方に死にたる弟の骨かと拾ふ

黒き砂に長き吾が影吸はれゆき海よりとほき沈黙がくる

終止符のごとく鞆型を砂に残しふりかへるとき海は泣きたり

怒氣含む海となりしきりに鳴動すされど深海に稚魚は群れるむ

師の君の臉を濡らす歌もがな魂たまゆりたてて角笛を吹く

身延山学生布教別動隊による

# —— 関西行学講習会と —— —— 街頭擊鼓宣言 ——

大阪府下の八尾・布施・小阪と兵庫県下の  
三田ならびに京都府下の福知山において

## 編 集 部



破邪顕正を獅子吼する別動隊長 口高白象師  
右は布教研修生 藤原成憲君

報道の時機は遅れたが、去る三

月十四日

教と法話座談会、並に淹修行。

月十一日より十七日まで一週間、学校の春休みを利用して、三月五日身延山大学を卒業したばかりの

協賛一市内城山地区猪崎鬼子母神堂妙法講中（主管一沢田妙喜法尼）なお別動隊員は左の通り。

鷺峰会第二期生を主力とする身延

鷺峰第一期生

山学生布教別動隊の街頭布教、な

沢田覚象　吉田風泉

らびに行学講習会と講演会が、大

近藤達也

阪府下の八尾市、布施市、及び兵

木村義賢

庫県下の三田市と、京都府下の福

川島本良　藤原成憲

知山市において展開された。スケ

和田龍口　法華堂見英

ジユールの概要は左の通り。

身延山大学二年

三月十一日～十三日

△以上敬称略▽

八尾市服部川の安国寺（住職一

このほか本妙庵修行中の福岡県

南日常師）における三泊三日間

柳河市台照院住職宮崎隆道師と、

の行学講習と、服部川町の街頭

兵庫県龍野市の甲南大学三年花房

布教。協賛一安國寺、大阪日蓮

徵君、ならびに福知山市の増田保

門下連合団。

君の三名が、終始特別参加した。

京都府福知山市における街頭布

門下連合団。

三月十五日

京都府福知山市における街頭布

門下連合団。

## 八 尾 布 教

行学講習会は三泊三日、昼夜をわかつたず本門の本尊、本門の題目本門の戒壇を中心として法華經教學の大綱が論議され、つめかけて來た奈良立正靈山会青年部、河内市蓮城寺青年部、大阪日蓮門下連合団青年と共に、時代を背負わんとする門下青年の潮流するような氣鋒は、大阪・神戸市街を眼下に展望する、静寂な天龍山安國寺道場にみちあふれていた。

写真上は安國寺の山を降つて服部川町街頭に立正安國を叫ぶ川島本良君。下は教学研修模様（右端日高隊長、中央南日常師）



## 大 阪 布 教

午前中、寺院檀信徒と打つて一丸となつた千余の擊鼓大行進は、近鉄布施・永和・小阪駅頭の商店街をぬつて堂々と展開。市街をゆするり、市民の耳目を奪つた。

この行進中、高校教師赤坂日幸先生（八十七才）の擊鼓する姿、宮本龍一氏の子息をはじめ小学生中学生の、教箋を配布する真剣な姿に感じ入らない者はなかつた。

午後は布施の宝樹寺本堂において「法華經と宗教統一」と題する、白熱した大講演会を開催。写真上は市街大行進。下は創価学会を破折する大阪日青の有吉正明師。





### 三田布教

午前中、奥町道場にて法話座談会。午後より三田（さんだ）市

街頭布教。福知山沿線の小都市はこの日まつたく身延山街頭布教一  
たろうか、説法中いたる處で、押し立てた玄題旗の廻りに、賽錢が  
雨のように降つた。

写真下は在家青年として市民に呼

びかける甲南大学花房徹君。上は  
奥町道場前の婦人会。前列中央奥  
十数ヶ所。三田市民にとつては初

町妙代法尼。

## 福知山布教



一滝にうたれる沢田覚象君

福知山市は昭和三十八年正月以降二度目の街頭布教。ここには鷺峰第一期生沢田覚象君の道場がある。福知山駅頭第一声を放ち、沢田道場の妙法講中と共に、市中商店アーケード街に擊鼓。折から降

りだした雨にもめげず、このシリーズ最後の布教を予定通り展開。翌日は隊員一同、明智光秀が築いた城山城趾の奥にある山腹の、妙法の滝にうたれて終日修行した。この滝は、沢田君の亡父の開いた滝である。雪どけの水はつめたかた。

修行即布教

思うに修行と布教は別々のものではない。大抵の人々は修行してから布教するものと思っている。然し、そうではない。修行すること自体が布教となつており、布教すること自体が修行になつていなければならぬ。修行即布教、布教即修行である。未熟な鷺峰会青年僧の布教に、大いなる成果があるならば、それは布教中に、皆と一緒に流した汗と涙の修行の功德であろう。

最後に此のシリーズ中、御協賛御供養された多くの方々に対しても深の感謝を捧げるものである。

8月29.30日

宗  
蓮  
青  
年  
大  
会  
九  
州  
に  
よ  
せ

鷺  
峰  
会

来る八月二十九・三十日の二日間、日蓮宗青年全国大会が九州で開催されるに際し、鷺峰会として一言呈したいと思います。

この大会は、これまで東京・京都において何回か開かれました。都において何回か開かれました。そしてその度ごとに日蓮宗青年運動が多少なりとも活発になつてきました。その功績は見逃せないことを思ひます。

然し創価学会の青年運動にくらぶれば、現状は実に微々たるものすぎません。といつて学会に対抗せよ、というのではありません。そういう枝葉末節にからわらず、日蓮大聖人の根本精神にかえつて法華經を如説に修行する実践行動を先ず起せ、と提唱したいのです。その実践行動とは、教学研修や唱題行も靈跡参拝も結構です。然し青年として最も大切なことは、不輕菩薩が街頭に但行礼拝を行じたように、またその不輕菩薩の跡を継承された日蓮大聖人が、街頭に立正安國を獅子吼されたように寺院殿堂の壁より出て、街頭に拳鼓宣令するということです。

身延山街頭布教は、身延の学生が日曜も休暇も返上して、各地に展開していますが、この布教に合法し協力する現地檀信徒の中に、何と青年の姿の少いことでしよう年寄りばかりで青年は皆無といつてよいほどです。これが宗門の現状なのです。このことは、街頭第一線に身を挺する青年の層が薄いというよりも断絶していることを

物語る何ものでもありません。

宗門の宗規宗則には、  
「日蓮宗寺院は必ず街頭布教を実施すること」

というように規定されています

然し一部を除けば、宗門全体の現状は、みずから進んで街頭布教を積極的に展開するところまで至つてはいないのです。

こうした時、全国大会が九州で開かれるに当たり、驚峰会として望みたいところは、

「宗門青年は、僧俗をとわず、一人残らずウチワ太鼓を持て。そして街頭に擊鼓宣令せよ」

ということです。同志がなれば一人でもやるという一騎当千の

士が一人あらわれ、それが不斷の実行をつゝけておりさえすれば、同志は必ず次第に現われ、寄り集つて来るものです。

こうした人たちが、少くとも春夏秋冬の年四回でも、県下を地域的に擊鼓宣令する時、全国的には恐るべき宗風がみなぎり、やがて全宗門の擊鼓は、日本国土をもゆさぶり動かす力となりましよう。

昨年の夏、驚峰会が大阪街頭布教を行つた際、協賛された大阪日青の方々と座談会が開かれました。その時、大阪日青の一人が次のよう申しました。

「身延の学生有志は毎年、休暇ごとに休暇を返上して身延山から全

国各地に街頭布教を開いています。我々はこれを出迎えて、出来るだけの後援をしているが、然しこれだけでは、すまないと思う。

毎年、身延山から街頭布教隊が全国に繰り出されるならば、全国寺院檀信徒も、これに呼応して現地で協力するだけではなく、擊鼓して身延へ身延へ集結して行かねばならない。

身延から全国各地へ、全国各地から身延へという、こういう擊鼓体制が有機的に展開される時、日蓮宗は素晴らしい宗門になつているだろう。その原動力は我々青年の

双肩にかゝつている」

考えさせられる言葉ですね。

## 信 仰 相 談 室

# 本 仏 信 仰 と

# 祖 先 崇 拝

解説担当 日 高 白 象

前 承

さきに本誌三月号の信仰相談室

において「本仏信仰と祖先崇拜」

その一」をかかげ、

「法華經の本尊は、久遠美成の本

師釈迦牟尼佛であり、これに対し

て南無妙法蓮華經と唱え奉ること

こそ、仏教本来の最も崇高な信仰

であるとは承知しながら、どうも

これは実感が湧いて来ない。

また一方、祖先崇拜といえば、

日本古來の民族の風習として、最

も身近かに感ぜられるはするが、然

し宗教的学にみて、どうも低級な

シャーマニズム的な感じがしてな

らない。

本仏信仰と祖先崇拜、これはどちらも大切な事と思うが、その障壁となつてゐるものは、どうすれば解決されるであろうか」

という御質問に対して、まず本

仏信仰の障壁を除くため、

1、釈尊に対する恋慕渴仰の心を

起さねばならない

2、お題目こそ本仏釈尊の血肉で

あり功德のすべてであるという

ことを確信しなければならない

という、二つの解答をいたして

おきました。

然し、本仏信仰を身近かに感ずるためにには、なお多くの事由をかけることが出来ましょが、その主だつたものは、以上の二点に

あると思いますので、他は割愛して、次の祖先崇拜に対する障壁について、お答えしてみたいと思います。

4

の靈が供養をうけないため憑靈となつて、子孫にたたるといふ恐怖が主なものとなつています。

さて祖先崇拜というものは、大体において祖靈信仰と母体としておきて来ている場合が多いようです。祖靈信仰というのは、日蓮大聖人が回向功德録の中に、

死人なれば、何事のあるべき  
と思って、後世をとわざれば  
惡靈となり、子々孫々にたた  
りをなす、とネ槃經と申す經  
に見えたり

な哲学的宗教、普遍的な世界的宗教においても、宗教が人間の生命に関するものである以上、その生命につらなる祖靈信仰というものは、到底払拭し得るものではあります。

5

ところで高次の宗教ともなればなるほど、報恩感謝というふうことを強調するものであつて、仏教でもお釈迦さまみずから、

れを尊いものとしてあがめる一方においては、それが粗鄙信抑といふ恐縮信抑につながりやすいだけに、勢い低級なシャーマニズム的な臭いを感じがちなもののなのです

先秦は、祖先に対する報恩感謝の思想を既存の神話と組み合わせて、次第に昇華されてきましたが、それだけに

## 1、仏法僧三宝の恩

### 2、親の恩

### 3、師の恩

### 4、一切衆生、国土の恩

という四恩を常に説かれており

事実お釈迦さまは、降魔成道の直

後、菩提樹の下で冥想されておら

れる間、ひとたび布教を決意され

るや、まず第一に、修行時代のア

ララ・カラーマ仙人やウツダガ仙

人という師の恩に報ゆべく、正覚

の法を説こうと志され、次に修行

時代の友達の恩に報ゆべく、そこ

からおよそ三百キロも離れた鹿野

園へ、わざ／＼赴いてまでも、五

人の修行者のために法を説き、更

に修行時代の主な場所であつたマ

ガダ国の首都王舍城へ赴いて、國王ビンビサーグ大王をはじめ、そ

の国民に法を説き、次いで生れ故

郷の恩に報ゆべくカビラ城へ赴い

て、父なる淨飯王をはじめ、その

國民のために法を説かれ、こうし

て八十オクシナガラ城外の沙羅双

樹において御入滅されるまでの御

生涯は、まさしく報恩のための布

教伝道であつた、とも申されまし

よう。

日蓮大聖人が終生、御両親を慕

われたことは、各宗開祖の中でも

あまりにも有名なことですが、今

なお身延山中には、五十丁の山坂

を登つた奥之院思親閣に、そのあ

とを留めており、枚挙にいとまも

ない報恩供養に閑するお言葉の中

には、開目鉢に、

儒家の孝養は今生に限る。未

来の父母をたすけざれば、外

家の聖賢は有名無実なり。

外道は過失を知れども、父母

をたすくる道なし。仏道こそ

父母の後世をたすければ、聖

賢の名はあるべけれ。

然れども、法華經已前等の大

小乗の經宗は、自身の得道な

おかないとたし。いかに況ん

や父母をや。ただ文のみあり

て義なし。

今、法華經の時こそ、女人成

仏の時、悲母の成仏もあらわ

れ、達多の惡人成仏の時、慈

父の成仏もあらわるれ。此の  
經は内典の孝經なり。

と仰せられて、法華經による孝  
養の尊さを明かにされています。  
また、かくの如く孝養を重んじ、  
追善供養を大切にしておられただ  
けに、弘安三年十月二十二日付け  
の尾張刑部左衛門尉の女房へ与へ  
られた御消息には、

親は十人の子をば養えども、  
子は一人の母を養うことなし  
あたたかなる夫をばいだきて  
臥せども、こごえたる母の足  
をあたたむる女房はなし。  
という有名なお言葉について  
たとい、また今生には、父母  
に孝養をいたすようなれども

後生の行方まで、問う人はな  
し。  
母の生きておわせしには、心  
には思われども、一月に一度  
は、人目のことなれば、形り  
如く問い合わせらる候えども、  
十三年四千余日の間のほどは  
かき絶えて、問う人はなし。  
生きておはせし時は、一日片  
時の別れをば、千方百日といそ  
思われしかども、十三年四千  
余日のほどは、つやつや音信  
なし。如何に聞かまほしくま  
しますらん。

と、死後における父は、祖先の  
靈を供養することの、怠りがちな  
人情のはかなさ、孝養心のあまり  
にも浅薄な、世の常の有様が嘆か  
れています。

然し、これは全く人ごとではあ  
りません。自分自身の身をつねつ  
て願りみても、父母・祖先に対す  
る追善供養は、人目に対してもなす  
場合があまりにも多く、生死を共  
にとまで誓いあつた人たち（親・  
子・兄・弟・夫・妻・恋人・友人  
等々）に先き立たれても、その供  
養は殆んどかえりみられていない  
ような有様なのです。

死せる人、その靈は主として、  
血縁を頼りに救いを求めるもので

す。というのは、靈自身では、みずから苦しみよりのがれることが出来ないからです。

生前、如何に権勢を誇り、財力をほしいまゝにしていても、それ 자체、成仏には何の関係もありません。却つて禍いとなつている場合が多いほどです。

靈の教わる道、それは信仰による、追養供養のほかはありません。わけても、その供養は法華経にすぎものはないのです。

## 6

ところが、如何に法華経によって追養供養をするといつも、既成教団のやつていることは、世上、

葬式仏教と批難されて年久しいよう、殆どの寺院が、生きた人間

と言われても返す言葉もありますまい。

の指導よりも、死んだ世界の法事ばかりをつかさどつて、能事たれりとし、また、こうしたことのみをもつて強大な新興宗教をおこしているものもあつて、ここに祖先崇拜とか先祖供養ということ自体が、既に仏教本来の道より逸脱して、低級な信仰に堕ち入つてしまつてゐるか、或は、そうなりかかつてゐるかのような、感をいたがざるを得ないものがあります。

ここにおいて問題は、先祖を供養するところの、法華経の解釈の在り方如何にある、ということが申されましよう。

法華経は、神がかりになつて、靈を呼び出したり、靈を納得させる手段ではあります。

まことに現実は、その通りであつて、このまゝでは法華経をたもちながら、却つて法華経の真義を殺してしまつてゐるようなもの、

前に本仏信仰の段でも述べまし

凡夫のものでもなく、神々のもの

でもなく、日蓮大聖人のものでも

なくして、實に久遠実成の本仏釈

尊ただ一人のものであり、本仏釈

尊の因行果徳のすべてなのです。

本仏の教習と慈悲そのものなのです。

またそうであればこそ、生きと

し生けるすべての者も、靈界の一

切の福音をも、開会得脱せしめる

ことが出来るのです。

祖先崇拜、それは人としてなす

べき当然の道であり、これを供養

する法華經は、本仏釈尊の仏知見

そのものであるということを逸し

てはなりません。

近代日蓮教学の鼻祖どうたわれ

た優陀那（ウダナ）院口輝大和尚  
が、次のように述べています。

唱え奉る妙法は、是れ三世諸

仏所証の境界、上行薩埵靈山

別付の真淨大法なり。

ひとたびも南無妙法蓮華經と

唱え奉れば、則ち事の一念三

千正觀成就し、常寂光土現前

し、無作三身の覚体あらわれ

我等行者一切衆生と同じく法

性の土に居して、自受法樂せ

ん。

祖先崇拜、それには親近感は覚

えるとしても、ともすれば原始的

充満し、三宝に供養し、あま

ねく衆生に施し、大乘一実の

境界に入らしめ、仏土を嚴淨

し、衆生を利益せん。

この文章は法華經要文集（略し

て要品）にも「蓮想」と題して記

載され、日蓮門下の人々には朝夕

に唱え親しまれていますが、今こ

の文意批判はともかくとしても、

ひとたびも唱え奉るお題目が、実

は本仏釈尊の功德そのものであれ

ばこそ、これをもつて上は仏界よ

り、下は地獄界に至るまで、供養

し回向していくことが出来るので

す。

いうことを踏ん張える時、祖先崇拝が仏教正道の中に生々として生きされて来るでしよう。

如何に祖先を崇拝し供養し、それをもつて強大な教団を組織して、持つところの法華經が本仏教尊の因果徳の二法でなければ、所詮、本尊も題目もあやまつて、疑似法華經となってしまうでしょう。

また一方、如何に法華經が本仏教尊のものであるからといって、釈尊にのみ法華經をささげるといつたような信仰では、教わねばならない迷界の衆生をも顧みないということになるのみならず、報ゆべき四恩にも報いないというこ

ととなつて、仏陀の本旨より逸脱してしまうでしよう。

日蓮聖人は、

根深ければ枝繁し

源遠ければ流れ長し

と仰せられていますが、本仏釈尊こそ、私たちの精神的な根であり源であり、そして祖先こそ、私たちの生命的な根であり源でもあります。

そうした当所に、本仏のお題目である大光明に輝く大マンダラ法界は、一分をも漏すことなく顯現しているのです。

### 鷲峰会では

何時でもどんな信仰相談にも応じます。

御遠慮なくおたずね下さい。

八係▽

お題目こそ、時々念々に上は仏界

より、下は地獄界に至るまで、あ

まねく、積極的に供養しなければ

ならないことが痛感されましよう

暑中休暇をさいて京都・大阪へ長馳展開する

### 第三十六回 身延山本隊街頭布教案内

昭和三十五年正月より始つた第三十六回目の身延山 街頭布教は、七月一七日身延山学園の学期試験の終了した夜、岩間布教師長以下総員五十名、貸切バスで身

延山を出発、京都・大阪へ長馳展開することとなりました。

七月十九日 京都布教

七月十八日 大阪布教

午前の部 九時岡崎満願寺出発、京都御所の建礼門にて日像上人京都開教宣言の往時を偲び、本満寺・妙覺寺・妙願寺を経て本法寺へ行進。

午後の部 十二時より本法寺にて大講演会  
講題「現代社会における日蓮門下の使命」

講師一身延山布教師長 岩間湛良師

二時本法寺出発、円山公園へ行進。バスで深草宝

塔寺・元政庵を参拝。伏見大手筋を行進。五時三十分大阪へ向い、南区谷町妙経寺宿泊。

午前の部 九時大阪市西成区玉出本通四ノ一の岡本組建築事務所出発、鶴見橋通・釜ヶ崎・飛田大門通・チヤン／＼横町を経て天王寺動物園前へ行進。

午後の部 一時より南区中寺町雲雷寺にて大講演会  
講題「世界平和と法華菩薩道」

講師一身延山布教師長 岩間湛良師

つゝいてベトナム戦争犠牲者慰靈法要、世界立正平和祈願祭、映画「世界の母」上映。

△註▽身延本隊は講演会終了と同時に、バスで身延帰山の途につき、その後は別動隊の布教。

## 第九回身延山別動隊街頭布教案内

京都・大阪につづいて尼崎・名古屋・瀬戸・小牧・一ノ宮・津島・沖之島へ

昭和三十七年の夏より始つた第九回目の身延山別動

宣言。つゞいて田中町本遠寺にて青年座談会。

隊街頭布教は、暑中休暇を返上し、本隊の京都・大阪  
布教の後をうけついで、左記の通り実施します。隊員

執塚にて伊勢湾台風七回忌慰靈法要。午後は瀬戸市  
は日高隊長以下十五名。

☆七月十七日、この日午後七時より大阪市南区中寺

の講演会。

町妙徳寺にて日高隊長の講演会。

講題「身延山を本とする世界広布の道」

その夜、谷町妙徳寺にて法話座談会。

☆七月二十日、午前中、尼崎街頭布教。正午より市

島の瑞円寺にて法話座談会。

内寺町長遠寺にて世界立正平和祈願と日高隊長の講

演会。

講題「立正安國と王仏冥合の世界」

四時名古屋へ、七時熱田駅より熱田神宮周辺を警護

(主催は日蓮宗中部行学会)

炎暑をおかして

## 身延より池上へ擊鼓行脚布教を敢行

七月二十五日より八月六日原爆記念日まで

日蓮大聖人が文永十一年五月十二日鎌倉をたつて身延へ入山された聖路を逆にとり、昭和三十七年夏休みを返上した鷺峰会学生有志（第一期生）が、身延より鎌倉へ、更に池上へと擊鼓行脚しぬいたことが、実は身延山街頭布教別動隊の発端となつたのですが、今度

は、大聖人が弘安五年九月八日身延山を発ち、富士山の裏側をめぐつて池上へ赴かれた聖路をたどるべく、関西・中京地における第九回別動隊街頭布教をおえて身延に帰山した翌七月二十六日より、休む間もなく、炎暑をおして擊鼓行脚を敢行することとなりました。

七百年前、大聖人が歩かれた道、特に身延より池上への聖路は、道順も遺跡もはつきりとしておらず、人

家もまばらで、実地踏査をかねる此の道中は、予想以上に困難をきわめることゝ思われます。然し、大聖人のあとを慕い、その足跡をたどる、こうした地味な擊鼓行脚の中から、やがて正法宣布の真味が湧き起つて来ることでしよう。

昭和三十七年は身延より池上へ、三十八年は大聖人の遊学の聖地比叡山横川へ、三十九年は熊本より身延へそして四十年は再び身延より池上へ、鷺峰会青年僧は毎年のようになります。そして一步／＼汗と折りしのみこませた大地から、きつと何時かは正法の芽がふき出て来ることでしよう。「天晴れぬれば地明かなり」仏天が動けば、必ず人も動くものです。

# 本誌見本贈呈の打切りと

## 誌代納入のお願い

本誌は創刊以来三ヶ年間、日蓮門下青年のための宗教雑誌として、また宗門有識者座右の書として御愛読されるべく、銳意執筆編集に努力して来ましたところ贊助会員をはじめ読者皆様の御理解ある

御支援により読者も増加し、印刷もガリバンからタイプそして活版となり、写真も掲載出来るようになりました。感謝に堪えないところであります。

ところが一万部発行をめざして一人でも多くの方々に御愛読して頂くべく、有縁の方々には来るだけ見本贈呈をつづけて来たのであります。

今や発行部数の四割五分が見本贈呈のまゝとなつてきました。このまゝで行けば遠からずして本誌の維持も困難となる危険が充分にあります。

もとより本誌は、創刊当時より身延山学生有志（後の鷲峰会）の街頭布教淨財を、そのまま投じて無料配布して来たもので、有料となつてからも贊助会費、布教淨財、その他特殊寄附の御支援によつて発行し、読者網の拡張上、見本贈呈をつづけて來たのであります。

然し、このため万が一でも発行資金に行きづまり、廃刊のやむなきに至れば、これまでの学生僧の不斷の努力も、御支援を惜まれなかつた方々の御丹誠も、水泡に帰してしまいます。

こゝにおいて、まことに断ち難い思ひがいたしますが、これまで見本贈呈からそのまま無料配布となつていた状態、即ち創刊以来三ヶ年の中、発行部数の四割五分までにも、ふくれあがつていた無料配布を、この際、思い切つて中止せざるを得なくなつたのであります。

この点、よく御理解下さいまして本誌が健全に運営され、より発展して、ページ数も購読者数も増加しますよう、御協力のほど切にお願い致すものです。無料配布撤排の時機は、本年八月三十

一日現在といたしますので、鷲峰会のこれまでの努力に対しましても、その期日までに誌代を御納入下さいますようお願ひ申上げます。

なお本誌は、一万部発行という初期の目的完遂のため、今後とも鷲峰会街頭布教の净財を悉く投じて充実を計つて行きますので、これまでの賛助会員の方々をはじめ特殊寄附された方々も、今後ますます御支援下さいますよう、お願ひ申上げます。

鷲峰会は健在です。そしてより健全なものとして、本誌も全国宗門青年必読雑誌となるよう努力をつづけて行き、更に身延山を本として国内はもとより、遠く海外へまでも撃鼓宣伝すべく、不断の積み重ねをつづけています。

# 編集後記

鷲峰 五六合併号

昭和四十年 第三卷 第五号  
通卷 第二十三号

定価 五十円 送料 十円

昭和四十年五月二十日 印刷  
昭和四十年六月一日 発行

編集兼発行人

山梨県身延町波木井 醍悟園本妙庵

日 高 白 象

印刷所 山梨県身延町波木井 梅平

藤田印刷所

山梨県身延町波木井三区四二二五

鷲峰会

振替(甲府)二〇九三番

会員

誌代 半年分 三六〇円 (送料共)

一年分 七二〇円 (送料共)

一年分 三〇〇〇円 (分納可)

- ★ とろく今度は五・六月合併号を出してしまいました。創刊以来、発行の遅れることは屡々のことながら、「どうなことがあつても合併号は出さないようにして」と頑張つて來たのでした。
- ★ 然し今度は、あまりにも発行が遅れすぎ、全国各地の読者から、「合併にして、発行を早く軌道にのせるように」と毎日のように勧告をうけ、面目もないことながら遂に合併号にふみ切つたのでした。発行を軌道にのせる以上、次号も七・八月合併号としなければなりませんが、この点、なにとぞ御寛恕願いたいと存じます
- ★ なお当然のことながら、合併号は一月分の誌代として計算させて頂きます。なにとぞ、これにこりず倍旧の御指導、御支援を願い上げます。